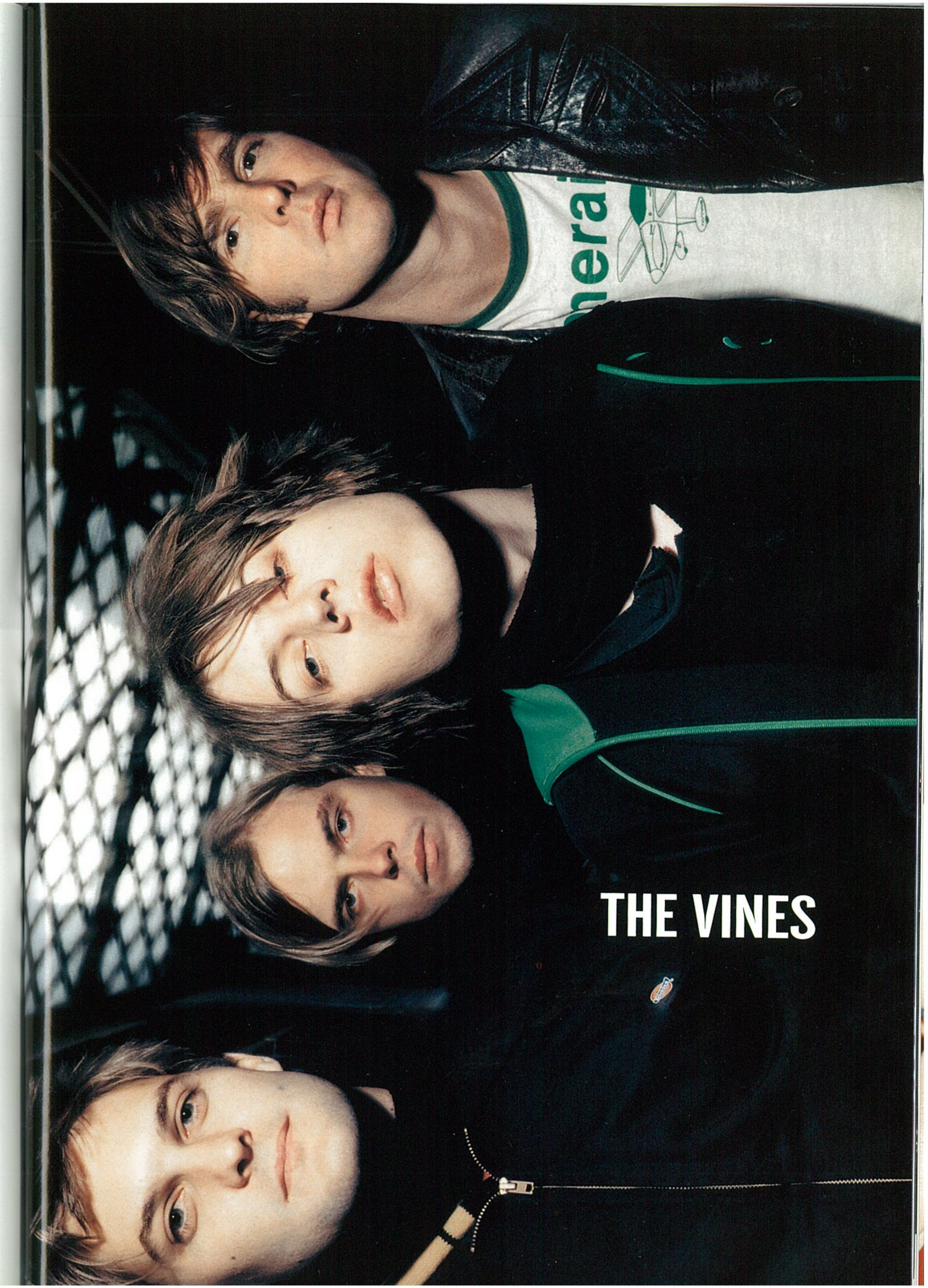

NEWROCK'N'ROLLDECADE

独自の世界観を持って、音楽で独特の宇宙を作ってる。そのことを誇りに思って大通りを堂々と歩いてるような爽快さがある。ぼくらもできればそういうバンドになりたいね

インタヴュー＝坂本麻里子　通訳＝髙見展　撮影＝TOM SHEEHAN

暴走気味のドライヴ感で押すギターを核にした肉太で簡潔なガレージ・ロック・サウンドと、中期ビートルズを思わせるメロディアスなポップさの同居――なんて常套句かもしれないが、そのロックンロールの黄金律を真っ正面から鳴らす新人が登場した。オーストラリアはシドニー出身、イギリスでセカンド・シングル"HIGHLY EVOLVED"が出たばかりの4人組ザ・ヴァインズ。キャッチーなメロディをなぞりながら、ファズったギターとクレイグ・ニコルズ(Vo/G)のダルで冷めているのに発火していく(矛盾してるが、そうなのだ)歌声で突っ走る、1分30秒ぽっきりのマジック。性急さとざっくり単純さに徹したポップネスに、ざわざわ胸騒ぎを感じずにいられない。つうわけで、デビュー・アルバム音源も届いてない状態ながら、超フライング・インタヴューを決行!

●メロディ・ラインはポップで、ビートルズなど60年代的なフレイヴァーを感じますが、ギター・サウンドはアグレッシヴでクレイジーですよね。このふたつの要素をうまくミックスさせることはある意味素晴らしいロックンロール・ミュージックの究極形だと思うんですが、このふたつの要素のどちらが欠けても、ヴァインズの音楽は成り立たない?

パトリック・マシューズ(B)「うん。絶対そうだね。ぼくら自身、いつもそう言ってきたよ。コミュニティ・ラジオに出演して、初めてのインタヴューを受けた時から、自分たちのサウンドを『ビートルズとニルヴァーナを掛け合わせたような音』って説明してきたんだ。それがそもそもの青写真。いつでもアンプの音量を目一杯上げて、泣き叫ぶような歪んだ音を出すのが好きだった。とにかく大きな音でプレイするのが楽しくてね。でも、いいメロディのある曲をプレイするのも楽しかった。アグレッシヴでありながら、クレヴァーである、っていうのが好きなんだ」

●初インタヴューでビートルズとニルヴァーナの名前を出すとは、かなり野心のあるバンドだと受け止められたんじゃないですか。

「別にうぬぼれてたわけじゃなくてね。サウンドを説明するのに名前を出しただけで、ビートルズとニルヴァーナに匹敵するくらいビッグになるんだ、とは言ってないし(笑)。目標にして頑張ろうとは思うけど、ビートルズの楽曲のレベルには到底及ばないってことは分かってる。でも、努力するにこしたことはないよね」

●"HIGHLY EVOLVED"や"GET FREE"は、アグレッシヴなギター・サウンドと咆哮のようなシャウトが強烈ですが、あの激しさはシンガーであるクレイグの中のどんな感情から生まれてくるものなんでしょう?

「その2曲で言えば、多分……歌詞と一致した感情なんじゃないかな。"HIGHLY EVOLVED"なら自信過剰で生意気なキャラクターになってたり。実際の彼は、いつもそんな感じじゃないんだけどね。"GET FREE"では文字通り『自由になりたい』っていう感情だろうし。自由になりたい、なんていう歌を作ってことは、何らかのフラストレーションを感じてたことは間違いない。歌いながら解放されようとしてるんじゃないかな。すべてを超越してね」

●しかしクレイグのシャウトというのは、聴いていても単純な解放感やカタルシスには結びつかない気がするんです。彼の中に常に何か満たされないものがあって、それが彼の歌声に暗いトーンや深みを与えている……そんな気がするんですが。

「ぼくはたとえばカート・コバーンの歌声を聴くと、エキサイティングな解放感が得られるんだ。あんな風に歌えたら、と思う。優れたロック・シンガーが喉から絞り出す声で歌う時のパワーはすさまじいよね。クレイグは最初からああやって歌えたわけじゃなくて、自分で声を鍛えてできるようになったんだ。喉から思い切り歌えるようになれるまでね。彼はそういうヴォーカルのインパクトのすごさが分かってるんだよ。誰でも歌えるスタイルじゃないからね。確かにダークなトーンはあると思うよ。あんまりハッピーな人間だったら生み出せないトーンだろうね」

●あなたたちにとっての音楽というのは、押しこめられた感情のはけ口みたいなものかな?と感じるのですが、いかがでしょう。

「プレイする側としてはそうだね。聴く側としては、世界と繋がる方法のひとつなんだよ。自分が感じてるのと同じことを、他の人も感じているんだ、という事実を確認するためのもの、というか」

●音楽をはけ口にしなければ、不安や孤独感に苛まれてしまうということはあります?

「……音楽をやってない頃から、もうだいぶ経ってるから、ちょっと思い出さなきゃ(笑)。……しばらくは誰にも理解されない小集団って感じではあったけど、外の世界を避けてたわけではなくて。やっぱり……音楽を通してでしか到達できない真実ってあると思うんだ。音楽を聴いたり演奏してないと、自分に誠実であるとは言えない。職場で同僚と話してるだけじゃ到達できないんだよね」

●最近、真剣に自分たちのロックンロールを追求する新人バンドが出てきてますよね。ストロークスやホワイト・ストライプス、BRMC……彼らに共感は覚えますか。

「もちろんだよ。その三つのバンドのレコードは持ってるし、繰り返し聴いてる。音楽的にはそれぞれ違うけど、君の言っている意味での共通点はあるね。うまく言えないけど、彼らはアメリカ出身でありながら、他のアメリカのバンドとは違うものを持ってるよね。どう見ても一般的な潮流に逆らってる。ホワイト・ストライプスには古いブルースのフィーリングがあるし、ストロークスは70年代NYパンクだし。彼らは独自の世界観を持って、音楽で独特の宇宙を作ってる。そのことを誇りに思って大通りを堂々と歩いてるような爽快さがある。ぼくらもできればそういうバンドになりたいね」